

夢追い型、無目的型、不本意型のフリーターに対する大学生の態度

University students' attitudes toward chasing dream type, aimless type, and unwilling type part-time workers

戸塚 唯氏

Tadashi TOZUKA

本研究の目的は、大学生が3タイプのフリーター（夢見型、無目的型、不本意型）に対して、どのような態度を持っているかを検討することであった。フリーターとは、「15～34歳の若年（ただし、学生と主婦を除く）のうち、パート・アルバイト（派遣等を含む）及び働く意志のある無職の人」である。調査対象者は159名の大学生であり、質問紙で3タイプのフリーターへの態度を測定した。分散分析の結果、大学生は夢追い型フリーターに対して、最もポジティブな印象を持っており、無目的型フリーターに対して最もネガティブな印象を持っていることが明らかとなった。

1. 問題

はじめに 近年、フリーターの増加が社会問題になっており、マスメディアでもしばしば取り上げられている。フリーターとは、「15～34歳の若年（ただし、学生と主婦を除く）のうち、パート・アルバイト（派遣等を含む）及び働く意志のある無職の人（いわゆる失業者）」（内閣府、2003）であり、平成18年度版労働経済白書（厚生労働省、2006a）によれば2005年現在のフリーターの数は約201万人に上る。ピークであった2003年（217万人）に比べて減ってきているものの、依然としてかなりの数を維持している。フリーターという生き方を選ぶことは、当の若者の人生に大きな影響を与える可能性がある。例えば、フリーターの労働内容は単純作業であることが多く、就労へのモチベーションを阻害しかねない。また、低い収入は心の余裕を消し去ったり、劣等感を生んだりするだろう。さらに、子供

を持つことを希望する者でも経済的理由から断念せざるを得ないこともあるなど、生活満足度や人生の充足感が低下する可能性が考えられる。また、フリーターを積極的に採用したいという企業は少ないというデータ（日本経済団体連合会（2006）の調査では、積極的に採用したいと回答した企業は全体の1.5%）や、一度フリーターになると、なかなか抜け出すのは難しいというデータも存在している（例えばUFJ総合研究所、2005）。一方、フリーターを選ぶことには、時間や人間関係にしばられないライフスタイルを得られる、夢や趣味の追求に専念できる、などの利点も存在している。フリーターという生き方はリスクも大きいですが、短期的に見れば利点も多く、それが若者をフリーターへ向かわせる1つの原因かもしれない。

フリーターという生き方を選択する若者が増加してきたことに対して、高校や大学の進路指導やキャリア相談担当者の間では困惑が広がっているように思われる。進路指導等の担当者は、リスクの大きいフリーターをあまり推薦したくないという思いを持っているだろうが、一方で、夢を追い求めたいという若者の自由意志や職業選択の自由は十分に尊重しなければという思いも持っているだろう。また、夢を追いたいという者がいる一方、責任ある仕事をしたく

千葉科学大学危機管理学部危機管理システム学科

Department of Risk and Crisis Management System,
Faculty of Risk and Crisis Management, Chiba Institute
of Science

(2007年9月28日受付, 2007年11月20日受理)

ないからフリーターになるという者や、就職したいと強く願っているけれども能力等の理由でフリーターにならざるを得ない者も存在しており、進路指導担当者はフリーターという生き方に対してどのような指導態度を取るべきか困惑しているように思われる。より良い進路指導・キャリア相談を実現するためには、フリーターに関する考え方の枠組みを整理する必要があるだろう。

フリーターを類型化する必要性 一般社会においてフリーターは、均一的・全体的に語られることが多いように思われる。例えば、「勤労意識が少ないからフリーターになってしまった」、「フリーターは夢を追っている。それは素晴らしいことだ。フリーターになってもかまわないだろう」、「フリーターは、不況や社会構造の変化によって生まれたものだ。彼らは被害者なのだ」などという意見をよく耳にするが、これらは主張こそ違うものの、どれもフリーターを均質な一群ととらえていると言える。このようにフリーターは均質な集団として論じられることが多いように思われる。しかし、実際にはフリーターはそれほど均質ではないのではないだろうか。フリーターの一部には確かに勤労意識が少ない者がいると思われるが、それはフリーターすべてに当てはまらないだろう。また同様に、フリーターの中には、正社員として就職したいけれども不況のため就職できない者もいるだろうが、すべてのフリーターがそのような状況にいるわけではないだろう。実際のところフリーターは「フリーターになった理由」によって大きく特徴が異なっており、また社会からの評価も異なっていると思われる。均一でないにもかかわらず、その就業形態だけに注目してフリーターをひとくりに考え、対処することは、かえって問題を複雑にしてしまう可能性がある。例えば、勤労意識を促進する指導を行うことは、何となくフリーターになるような者には有効であろうが、就職活動を一生懸命にやったが不況のため採用されずやむを得ずフリーターになった者にはあまり意味がないだろう。フリーター問題に対して実情に合ったより良い対応をするためには、フリーターをひとくりに考えるのではなく、フリーターになった理由によってフリーターをタイプ分けし、そのタイプごとに対処を考えていく必要がある。小杉(2002)、上西(2002)は、「フリーターになった理由」の点からフリーターを夢追求型、モラトリアム型、やむを得ず型に類型化することを提唱しているが、これはフリーター問題を整理する上で非常に有益な考え方であると思われる。

本研究の目的 高校の進路指導や大学のキャリア相談において、フリーター志望者へのより適切な指導を実現するためには、フリーターに対する若者の意識について適切に把握することが不可欠である。その際、フリーターを均質なものとして扱うのではなく、フリーターを志望理由(フリーターになった理由)によってタイプ分けし、それぞれのタイプのフリーター像を明らかにすることが重要である

う。若者が個々のタイプのフリーターに対してどのような印象・意識を持っているかを明らかにすることによって、より適切な進路指導・キャリア相談が実現すると思われる。そこで本研究は、大学生を調査対象者として採用し、志望理由別(夢追い型、無目的型、不本意型⁽¹⁾)のフリーターに対する様々な意識を回答させ、それぞれのタイプのフリーター像を明らかにすることを試みた。なお、特にフリーターへの印象やフリーターの満足度・不安度・収入の程度などは、年齢によっても大きく異なることが予想されたため、それらの指標については年齢層別(10代後半、20代前半、20代後半、30代前半)に測定し、分析を行った。

2. 方法

調査対象者 調査の実施時期は2006年7月であり、調査対象者は千葉県内の大学生159名であった。そのうち、回答に不備のあった者16名を削除した結果、分析対象者は143名(男性95名、女性48名)となった。分析対象者の平均年齢は18.83歳(SD=1.13)であった。

調査の概要 調査は大学の講義時間内に集団実施した。はじめに、この調査への参加が強制ではないこと、回答したくない項目には回答しなくてもよいこと、個人が特定される形で結果を公表しないことなどを説明した。質問紙はA4用紙12枚から成っており(表紙を含む)、無作為配布した。質問紙の表紙には題目(「フリーターに関する意識調査」と、フリーターに関する次のような簡単な説明文が入っていた。『フリーターとは— 15~34歳の年齢層(学生と主婦を除く)で、アルバイトやパート(派遣等を含む)をして生計を立てている人および働く意思のある無職の人』質問紙は、夢追い型質問紙、無目的型質問紙、不本意型質問紙の3つの種類が存在し、調査対象者はこれらのうちの1つだけに回答した。各質問紙には、1つのタイプのフリーターに関する質問が設けられていた。例えば、夢追い型質問紙には「夢追い型フリーターが持っている意志の強さは、一般的に言ってどの程度だと思いますか」等の項目が存在したが、無目的型質問紙ではそれが「無目的型フリーターが持っている意志の強さは、一般的に言ってどの程度だと思いますか」等のようにになっていた(不本意型質問紙もそれに準じていた)。本来、調査対象者には全てのタイプのフリーターについて回答してもらうのが望ましいと思われるが、調査対象者の認知的負荷や時間的負担を考慮して1タイプに関してのみ回答させた。

測定項目 ①各志望理由タイプのフリーターの主観的存在割合(3質問紙共通の項目):はじめに質問紙で、次のように3つの志望理由タイプについての説明を行った。『夢追い型・・・夢を達成するために、フリーターになったタイプ。アルバイトをして生活費を稼ぎ、残りの時間を夢の実現のために使う。夢は芸術や芸能の分野の仕事であることが多い。無目的型・・・就職したくなかったり、特に就き

たい仕事が見つからなかったりして、なんとなくフリーターになったタイプ。「やりたいことがみつからない」と述べる人が多い。不本意型・・・正社員として働く意思はあるものの、新卒の採用試験に合格しなかったり、いったん会社をやめた後で再就職ができなかったりしたタイプ。しかたなくフリーターをしている』このような説明文を読ませた後、「それぞれのタイプのフリーターは、何%くらいずつ存在すると思いますか？ 全体を100%として、それぞれの%を考えてください」という項目で、各タイプの存在割合を測定した（数字を記入させた）。

②好感を持つ・好感を持たない志望理由タイプ（3質問紙共通の項目）：「この3つのタイプのうち、もっとも好感を持つタイプに○をつけてください」という項目と「この3つのタイプのうち、もっとも好感を持たないタイプに○をつけてください」という項目で測定した。どちらの項目とも選択肢は夢追い型、無目的型、不本意型であった。

③各志望理由タイプの意志の強さ（質問紙別の項目）：「×型フリーターが持っている意志の強さは、一般的に言って、だいたいどの程度だと思いますか？」という項目で測定した（1-7点；非常に弱い1点、非常に強い7点）。なお、夢追い型質問紙では、×の部分に「夢追い型」という文字を、無目的型質問紙では「無目的」という文字を、不本意型質問紙では「不本意」という文字を入れていた。後述の項目も同様である。

④各志望理由タイプのコミュニケーション能力（質問紙別の項目）：「×型フリーターが持っているコミュニケーション能力の高さ（自分の意思を適切に表出する能力）は、一般的に言って、どの程度だと思いますか？」という項目で測定した（1-7点；非常に低い1点、非常に高い7点）。

⑤各志望理由タイプの人間関係能力（質問紙別の項目）：「×型フリーターが持っている人間関係能力の高さ（周囲の人とうまくやっていく能力）は、一般的に言って、どの程度だと思いますか？」という項目で測定した（1-7点；非常に低い1点、非常に高い7点）。

⑥各志望理由タイプの仕事能力（質問紙別の項目）：「×型フリーターの仕事能力の高さ（求められたことを、すばやく適切に実行する能力）は、一般的に言って、だいたいどの程度だと思いますか？」という項目で測定した（1-7点；非常に低い1点、非常に高い7点）。

⑦各年齢層・各志望理由タイプのフリーターへの印象（質問紙別の項目）：「△の×型フリーターについて、どのような印象を持っていますか？」という項目で測定した（1-7点；非常に悪い印象を持っている1点、非常に良い印象を持っている7点）。なお、△の部分で「10代後半（15歳以上～20歳未満）」、「20代前半（20才～25才未満）」、「20代後半（25才～30才未満）」、「30代前半（30才～35才未満）」のように変化させて、4つの年齢層の当の志望理由タイプの印象を尋ねた。すなわち、夢追い型質問紙の調査対象

象者は、10代後半、20代前半、20代後半、30代前半の夢追い型フリーターに対する印象をそれぞれ回答した（無目的型、不本意型もそれに準じている）。なお△に入る語句については後述の項目でも同様である。

⑧各年齢層・各志望理由タイプのフリーターの収入（質問紙別の項目）：「△の×型フリーターは、一月にだいたいどの程度の収入を得ていると思いますか？」という項目で測定した（数字を書き込ませた）。△の部分を変化させて、4つの年齢層の当の志望理由タイプの収入（予想）を尋ねた。

⑨各年齢層・各志望理由タイプのフリーターの満足度（質問紙別の項目）：「△の×型フリーターは、全体的に今の生活に満足していると思いますか？」という項目で測定した（1-4点；満足していない1点、満足している4点）。△の部分を変化させて、4つの年齢層の当の志望理由タイプの満足度（予想）を尋ねた。

⑩各年齢層・各志望理由タイプのフリーターの不安（質問紙別の項目）：「△の×型フリーターは、どの程度将来への不安を感じていると思いますか？」という項目で測定した（1-5点；全く不安を感じていない1点、非常に大きな不安を感じている5点）。△の部分を変化させて、4つの年齢層の当の志望理由タイプの不安（予想）を尋ねた。

3. 結果と考察

各志望理由タイプの主観的存在割合 集計の結果、大学生は、夢追い型・無目的型・不本意型が、順に全体の23.50%、46.91%、29.59%の割合で存在していると考えていた。小杉（2005）は、2001年時点の実際のフリーターの分布が、夢追い型が約1.5割、モラトリアム型（本研究における無目的型）が約4.5割、やむを得ず型（本研究における不本意型）が約4割であると報告している。これを本研究の結果と照らしてみると、大学生は夢追い型の割合を実際よりも多く、不本意型を実際よりも少なく見積もっているといえる。安田（2003）が主張するようにフリーター問題には景気や社会構造的な原因も大きく関わっていると考えられ、実際のところかなりの数の不本意型フリーターが存在しているのだが、大学生にとって不本意型フリーターの存在は薄いようである。なお本研究の調査は2006年に実施されたものであり、2001年時点のデータと比較して結果を解釈することには、一定の限界があることを断っておきたい。

各志望理由タイプへの好悪 最も好感をもつ志望理由タイプを選択させたところ、夢追い型の度数は106、無目的型の度数は3、不本意型の度数は34となった。一方、最も好感を持たない志望理由タイプを選択させたところ、夢追い型の度数は4、無目的型の度数は132、不本意型の度数7となった。これらのデータを用いて χ^2 検定を行ったところ、度数の偏りが有意であることが確認された（ $\chi^2(2)=235.64, p<.001$ ）。残差分析の結果、最も好感をもつ志望理由タイプとして夢追い型が選択される傾向が強く、

最も好感を持たない志望理由タイプとして無目的型が選択される傾向が強いことが示された。

各志望理由タイプのフリーターの諸能力に関する調査対象者の予想 当初、志望理由タイプを独立変数、「意志の強さ」「コミュニケーション能力」「人間関係能力」「仕事能力」の値を従属変数とする多変量分散分析を行うことを意図したが、BOXのM検定において実験条件間の等質性が保障されなかったため ($F(20,69069)=1.67, p<.03$)、多変量分散分析を断念し、従属変数ごとに分散分析を行った。各項目の平均値や多重比較結果の一覧を表1に示す。まず「意志の強さ」を従属変数とした分散分析を行ったところ、志望理由タイプの主効果が有意であり ($F(2, 140)=81.83, p<.001$)、夢追い型フリーターの得点が最も大きかった。次に、「コミュニケーション能力」を従属変数とした分散分析を行ったところ、志望理由タイプの主効果が有意であり ($F(2, 140)=39.74, p<.001$)、夢追い型フリーターの得点が最も大きかった。次に、「人間関係能力」を従属変数とした分散分析を行ったところ、志望理由タイプの主効果が有意であり ($F(2, 140)=12.74, p<.001$)、夢追い型フリーターの得点が最も大きかった。次に、「仕事能力」を従属変数とした分散分析を行ったところ、志望理由タイプの主効果が有意であり ($F(2, 140)=10.43, p<.001$)、夢追い型フリーターや不本意型フリーターの得点が、無目的型フリーターの得点よりも高かった。夢追い型の各項目の得点は、いずれも4点(当の回答段階のラベルは「平均的な高さである」と6点(「高い」)の間に位置しており、大学生は夢追い型フリーターの諸能力を平均以上と評価していることが明らかとなった。一般的にフリーターは能力が低いとみなされやすいように思われるが、夢追い型フリーターの能

力がこれだけ高く評価されたことは興味深い。次に無目的型の各得点は、いずれも2点(「低い」と3点(「やや低い」)の間に位置しており、能力が低いと評定された。特に「意志の強さ」の得点が低く、無目的型フリーターが忍耐や実行力に欠けるイメージで捉えられていることが示唆された。不本意型フリーターの各得点は、いずれも3点(「やや低い」と4点(「平均的な高さである」)の間に位置しており、平均よりもやや低い能力と評定された。この結果は不本意型フリーターが就職したくてもできなかったことと関係しているのかもしれない。これらの結果を総合すると、フリーターの能力はタイプによって大きく異なって認識されていることが明らかとなった。

各志望理由タイプ・各年齢層のフリーターへの印象 志望理由タイプ(被験者間要因)とフリーターの年齢層(被験者内要因)を独立変数、フリーターへの印象を従属変数とする2要因の分散分析を行った。その結果、まず志望理由タイプの主効果 ($F(2, 140)=32.16, p<.001$) が有意であった。多重比較の結果、夢追い型が最も高く、ついで不本意型が高く、無目的型が最も低いことが明らかとなった。この結果は、形成されている印象が、志望理由のタイプごとに異なっており、夢追い型が最も好感をもたれていることを示している。ただし、夢追い型であってもその平均は3.92 (SD=1.65) でしかなく(「やや悪い印象を持っている3点」と「特によい印象も悪い印象もない4点」の間に位置)、フリーター以外の人々と比較した場合には、さほど高い得点とは言えないと思われる。一方、最も印象が悪かったのは無目的型であった。その平均は2.47 (SD=1.03) であり(「悪い印象を持っている2点」と「やや悪い印象を持っている3点」の間に位置)、かなり得点が低かった。

表1 各志望理由タイプのフリーターの諸能力に関する調査対象者の予想

		夢追い型 フリーター	無目的型 フリーター	不本意型 フリーター	分散分析 の結果	多重比較の結果
	<i>n</i>	46	46	51		
意思の強さ	<i>M</i>	5.39	2.11	3.78	<i>s</i>	夢>不>無
	<i>SD</i>	(1.29)	(1.10)	(1.29)		
コミュニケーション能力	<i>M</i>	4.65	2.67	3.45	<i>s</i>	夢>不>無
	<i>SD</i>	(1.18)	(0.92)	(1.10)		
人間関係能力	<i>M</i>	4.11	2.91	3.41	<i>s</i>	夢>不>無
	<i>SD</i>	(1.32)	(1.09)	(1.00)		
仕事能力	<i>M</i>	4.02	2.83	3.55	<i>s</i>	夢=不>無
	<i>SD</i>	(1.42)	(1.06)	(1.29)		

注1: 表中の*M*は、調査対象者が予想した各タイプのフリーターの諸能力の高さ(平均)を示す。得点の範囲はどの項目も1-7点であり、数値が大きいほど当の能力が高いことを示す。

注2: 分散分析結果の列の「*s*」は、1要因3水準の分散分析(被験者間)の結果が有意であったことを示す(5%水準)。分散分析についてのより詳細な結果は文中に記した。

注3: 多重比較の結果の列における「夢」は夢追い型フリーター、「無」は無目的型フリーター、「不」は不本意型フリーターの水準を示す。また「>」は記号の右側の水準よりも左側の水準の方が有意に得点が高いことを、「=」は左右の水準間に有意な差がないことを示す。

表2 各志望理由タイプ・各年齢層のフリーターの諸特徴に関する調査対象者の予想、および2要因分散分析の結果

	夢追い型		無目的型		不本意型		分散分析の結果	多重比較の結果
	フリーター	フリーター	フリーター	フリーター	フリーター	フリーター		
10代後半印象	<i>n</i> 46	46	51	46	51	46	フリータータイプの主効果 <i>s</i> 年代の主効果 <i>s</i> 交互作用 <i>ns</i>	夢>不<無 10後>20前>20後>30前
20代前半印象	<i>M</i> 4.74 <i>SD</i> (1.42)	3.20 (0.98)	3.84 (0.92)	2.83 (0.82)	3.61 (0.96)	2.24 (0.86)		
20代後半印象	<i>M</i> 4.46 <i>SD</i> (1.39)	2.83 (0.82)	3.61 (0.96)	2.24 (0.77)	3.06 (0.86)	2.24 (0.86)		
30代前半印象	<i>M</i> 3.63 <i>SD</i> (1.42)	2.24 (0.77)	3.06 (0.86)	1.63 (0.80)	2.49 (0.95)	2.49 (0.95)		
10代後半収入	<i>M</i> 8.63 <i>SD</i> (3.32)	8.64 (3.96)	10.47 (3.53)	8.64 (3.96)	10.47 (3.53)	8.64 (3.96)	フリータータイプの主効果 <i>ns</i> 年代の主効果 <i>s</i> 交互作用 <i>ns</i>	30前>20後>20前>10後
20代前半収入	<i>M</i> 12.20 <i>SD</i> (5.08)	11.96 (4.72)	13.61 (4.15)	11.96 (4.72)	13.61 (4.15)	11.96 (4.72)		
20代後半収入	<i>M</i> 13.98 <i>SD</i> (5.69)	13.85 (4.68)	15.42 (5.47)	13.85 (4.68)	15.42 (5.47)	13.85 (4.68)		
30代前半収入	<i>M</i> 14.74 <i>SD</i> (5.67)	14.77 (5.05)	17.10 (7.13)	14.77 (5.05)	17.10 (7.13)	14.77 (5.05)		
10代後半満足度	<i>M</i> 3.04 <i>SD</i> (1.03)	2.82 (1.02)	2.16 (0.95)	2.82 (1.02)	2.16 (0.95)	2.82 (1.02)	フリータータイプの主効果 <i>s</i> 年代の主効果 <i>s</i> 交互作用 <i>s</i> ・10後水準におけるフリータータイプの単純主効果 ・20前水準におけるフリータータイプの単純主効果 ・夢追い型水準における年代の単純主効果 ・無目的型水準における年代の単純主効果 ・不本意型水準における年代の単純主効果	夢=無>不 10後>20前>20後=30前 夢=無>不 夢=無>不 10後>20前>20後>30前 10後>20前>20後=30前 10後>20後=30前、10後=20前、20前=20後
20代前半満足度	<i>M</i> 2.57 <i>SD</i> (0.83)	2.39 (0.88)	1.95 (0.82)	2.39 (0.88)	1.95 (0.82)	2.39 (0.88)		
20代後半満足度	<i>M</i> 2.07 <i>SD</i> (0.77)	1.91 (0.76)	1.63 (0.75)	1.91 (0.76)	1.63 (0.75)	1.91 (0.76)		
30代前半満足度	<i>M</i> 1.63 <i>SD</i> (0.88)	1.80 (1.09)	1.59 (0.85)	1.80 (1.09)	1.59 (0.85)	1.80 (1.09)		
10代後半不安	<i>M</i> 2.20 <i>SD</i> (0.91)	2.24 (0.87)	2.67 (0.82)	2.24 (0.87)	2.67 (0.82)	2.24 (0.87)	フリータータイプの主効果 <i>ns</i> 年代の主効果 <i>s</i> 交互作用 <i>s</i> ・10後水準におけるフリータータイプの単純主効果 ・30前水準におけるフリータータイプの単純主効果 ・夢追い型水準における年代の単純主効果 ・無目的型水準における年代の単純主効果 ・不本意型水準における年代の単純主効果	30前>20後>20前>10後 不<無=夢 夢>無、夢=不、不=夢 30前>20後>20前>10後 30前=20後>20前>10後 30前=20後>20前>10後
20代前半不安	<i>M</i> 2.93 <i>SD</i> (0.74)	2.91 (0.78)	3.12 (0.74)	2.91 (0.78)	3.12 (0.74)	2.91 (0.78)		
20代後半不安	<i>M</i> 3.54 <i>SD</i> (0.66)	3.61 (0.91)	3.73 (0.78)	3.61 (0.91)	3.73 (0.78)	3.61 (0.91)		
30代前半不安	<i>M</i> 4.33 <i>SD</i> (0.79)	3.76 (1.25)	4.06 (1.14)	3.76 (1.25)	4.06 (1.14)	3.76 (1.25)		

注1:表中の*M*は、各年代・各タイプのフリーターへの印象、および調査対象者が予想した各年代・各タイプのフリーターの収入・満足度・不安を示す(平均)。得点の範囲は、印象が1-7点であり、満足度は1-4点であり、不安は1-5点であった。数値が大きいほど印象・満足・不安が高いことを示す。なお収入については自由記述で金額を回答させた。

注2:「分散分析の結果」の列における「*s*」は当の効果があること(5%水準)を、「*ns*」は有意でないことを示す。交互作用の下の「*・*」で始まる行は有意であった単純主効果を示している。

注3:「多重比較の結果」の列における「夢」は夢追い型フリーター、「無」は無目的型フリーター、「不」は不本意型フリーターの水準を示す。また「10後」は10代後半、「20前」は20代前半、「20後」は20代後半、「30前」は30代前半の水準を示す。「>」は記号の右側の水準より左側の水準の方が有意に得点が高いことを、「=」は左右の水準間の得点に有意な差がないことを示す。

特に、30代前半の無目的型の印象は悪かった。一方、年齢層の主効果 ($F(3, 420) = 117.03, p < .001$) も有意であった。多重比較の結果、年齢が若いほど印象が良いことが明らかとなった。この結果は、年齢が若いフリーターほど許容されやすく、年齢が高くなるほど許容されなくなることを示している。各条件の平均や標準偏差を表2に示す。

各志望理由タイプ・各年齢層のフリーターの収入の予想
志望理由タイプ(被験者間要因)とフリーターの年齢層(被験者内要因)を独立変数、フリーターの収入予想を従属変数とする2要因の分散分析を行った。その結果、年齢層の主効果 ($F(3, 420) = 155.30, p < .001$) のみが有意であった。多重比較の結果、年齢が高くなるほど得点が高いことが明らかとなった。この結果は、どの志望理由タイプのフリーターも年齢が高くなるほど収入が上がると大学生が予想していることを示している。ただし、大学生はフリーターの収入を高めて予想している可能性がある。平成17年賃金構造基本統計調査(全国)結果の概況(厚生労働省、2006b)をもとに年齢層別に男性フリーターの月収(括弧内は女性フリーターの月収)を算出してみると、18~19歳が79000円(77000円)、20~24歳が86000円(86000円)、25~29歳が98000円(92000円)、30~34歳が106000円(91000円)となった⁽²⁾。この数値と比較してみると、大学生はすべての年齢層のフリーターの月収を実際よりも高く予想していたといえる。このような楽観的な予想が、フリーター増加の一因であるかもしれない。各条件の平均や標準偏差を表2に示す。

各志望理由タイプ・各年齢層のフリーターの満足度の予想
志望理由タイプ(被験者間要因)とフリーターの年齢層(被験者内要因)を独立変数、満足度予想を従属変数とする2要因の分散分析を行った。その結果、志望理由タイプの主効果 ($F(3, 420) = 9.04, p < .001$)、年齢層の主効果 ($F(3, 420) = 51.40, p < .001$)、交互作用 ($F(3, 420) = 2.87, p < .001$) が有意であった。交互作用の結果を概観すると、10代後半や20代前半の年齢層においては、夢追い型や無目的型の満足度が不本意型のそれに比べて有意に高かったが、20代後半以降、その差はなくなっていた。すなわち、大学生は年齢が若い段階においては志望理由タイプによってフリーターの満足度は異なると予想しているが、年齢が高い段階ではどのタイプのフリーターも一様に満足度は低いと予想していた。30代前半の満足度得点はどの志望理由タイプにおいても「満足していない1点」と「やや満足していない2点」の間に位置していた。各条件の平均や標準偏差を表2に示す。

各志望理由タイプ・各年齢層のフリーターの不安の予想
志望理由タイプ(被験者間要因)とフリーターの年齢層(被験者内要因)を独立変数、不安予想を従属変数とする2要因の分散分析を行った。その結果、年齢層の主効果 ($F(3, 420) = 133.14, p < .001$) と交互作用 ($F(3, 420) = 2.73, p$

$< .05$) が有意であった。交互作用の結果を概観すると、10代後半の条件において、夢追い型・無目的型に比べて不本意型フリーターの不安が有意に大きいことが示された。しかしながらその不本意型の得点は2.67とそれほど大きいものではなく(「ほとんど不安を感じない2点」と「多少不安を感じる3点」の間に位置)、大学生はそれほど強い不安を予想していなかった。一方、30代前半においては、夢追い型の不安得点は4.33であり(「大きな不安を感じる4点」と「非常に大きな不安を感じる5点」の間に位置)、夢追い型の不安得点が最も大きくなっていった。夢追い型は10代後半では最も不安が低く予想されていたが、30代前半では最も高く予想されていた。この結果から、夢追い型は年齢を重ねるごとに急速に不安度があがると予想されていることが示唆された。各条件の平均や標準偏差を表2に示す。

4. 総合考察

各タイプのフリーターの特徴と望まれる対応策
夢追い型フリーターに対しては、大学生はその諸能力を高く評価していた。特に意志の強さの得点は高く、夢追い型フリーターは目標に向けて邁進する存在として認知されていた。一般にフリーターの能力は総じて低く見積もられがちだが、少なくとも大学生は、夢追い型フリーターに限って高い能力があるとみなしており、望ましいものと考えている傾向が示唆された。このような考えを持つ若者に対して、進路指導担当者が「意志が弱く、能力の低い者がフリーターになってしまうんだ」という主張を展開したならば、若者に反発が生じる可能性は大きいと思われる。一方、夢追い型フリーターは、若い時分は満足度が高いものの、年齢が高くなるとともに満足度が急激に低下することや、年齢とともに不安感が高まることも認知されていた。総合的にみると、大学生は、若い時分に夢追い型フリーターでいることには比較的ポジティブな意識を持っているが、年齢が上がるにつれてネガティブな意識が強くなることが示唆された。進路指導やキャリア相談において夢追い型フリーター志望者と話し合う際には、頭ごなしにフリーターとして生きることを否定するのではなく、彼らが夢を追いたいと思っていることは素晴らしいことだと認め、その後、夢追い型フリーターの収入がそれほど多くないこと、年齢が高くなってもフリーターでいることになった場合に不安感が大きくなること、フリーターから正社員等への転職が難しいという事実、などをよく考えさせる必要があるだろう。自己実現を目指すことは非常に望ましいことであるが、フリーターでいることにはリスクも存在するということを十分に考えさせるべきであろう。

無目的型フリーターに対しては、大学生はその諸能力を低く評定していた。特に意志の強さの得点は低く、印象得点はどの年齢層においても他のタイプのフリーターよりも

低かった。大学生は、全体的に無目的型フリーターを最もネガティブに評価していたといえる。無目的型フリーター志望者に進路相談等を行う際には、無目的型フリーターは他者から能力が低いとみなされたり、悪い印象を持たれたりすることをデータで示し、歳をとるにつれて高まる不安感の増加やフリーターから正社員等への転職が難しいという事実、フリーターと正社員の生涯賃金の格差を熟慮させる必要があるだろう。長期的視野に立った人生の設計図を考えさせることなどが有効であるかもしれない。さらに当人の職業意識・職業的スキルを向上させる取り組みを行うことも重要である。ただし職業意識の育成は一朝一夕にできるものではないので、卒業間近の段階ではなく、高校・大学の入学後すぐの段階から無目的型フリーター志望者に対する指導が必要である。そしてそのためには、早期に無目的型フリーター志望者、潜在的無目的型フリーター志望者を発見するスクリーニングテストを開発していく必要があるだろう。

不本意型フリーターに関しては、大学生は彼らの存在割合を低く見積もっており、大学生にとって不本意型フリーターの実感が薄いことが明らかとなった。これは不本意型フリーターというものが、当人が選択してなるようなものではないことが関係しているのかもしれない。すなわち、夢追い型や無目的型フリーター志望者・潜在的志望者は、在学中からフリーターになることを周囲に仄めかし、その存在を周囲に知らしめている可能性があるが、不本意型は就職活動に失敗するまでその存在が目立つことは少なく、そのため大学生にとってその認知度が低かったのかもしれない。不本意型フリーターを少なくしていくためには、若者に就職に失敗してフリーターになっている人がかなりたくさんいる事実を在学中から周知させ、若者に自分自身の職業的能力の程度や自分の志望する職業分野の就職困難度について熟考させておく必要があるだろう。自分の能力を過大視していたり、求人数が少ない職業分野のみを考慮したりすることは不本意型フリーターを増加させる可能性がある。また在学中から具体的な職業的スキルを習熟させ、採用してもらえる可能性を上げておくことも必要だろう。

本研究の結果、若者は3つのフリータータイプに対して異なる意識を持っていることが明らかとなった。特に夢追い型フリーターへの意識は予想以上にポジティブであった。高校の進路指導、大学のキャリア相談においては、フリーター志望者に画一的な指導をするのではなく、当のフリーター志望者がどのタイプのフリーターになることを意図しているのかをよく理解し、それに応じた指導を行うことが望まれる。それによって、よりよい進路選択・職業選択が実現すると思われる。

今後の課題 本研究は大学生を調査対象者にしていた。しかし、高校卒業後フリーターになる者も多く、高校生のデータをとることも必要であると思われる。安田（2003）が

指摘しているように、高卒者には不本意型フリーターが多いと考えられることから、高校生は大学生よりも不本意型フリーターに対して好意的な印象を持っているかもしれない。また、本研究では上西（2002）、小杉（2002）の分類に基づいてフリーターを3タイプに分類して検討したが、上西（2002）はこの3タイプを基礎にして、さらに下位の分類を設けて計7タイプにして考えることを提唱している。例えば夢追求型は、さらに「芸能指向型」と「職人・フリーランス指向型」に分類されている。芸能方面を目指すフリーターと職人を目指すフリーターでは若者の印象も異なる可能性がある。今後、このような細分化された分類を用いてより詳細な検討を行う必要があるだろう。また、より適切な進路選択を促進するための具体的方策の検討も必要であろう。本研究によって、各タイプへの若者の意識の差異が明らかとなったが、今後はこれらのデータを手がかりにして、十分な思慮を伴わずにフリーターになろうとする者を抑制していく方策を構築していく必要がある。フリーター問題に対する、教育心理学・社会心理学からのさらなる貢献が望まれる。

なお、本研究は文部科学省科学研究費補助金若手研究B（課題番号 18730388、研究代表者 戸塚唯氏）の助成を受けて行われた。

注

- (1) 小杉（2002）、上西（2002）は、夢追求型、モラトリアム型、やむを得ず型という名称を使っているが、モラトリアム型という語は一般的な調査対象者には難解であると思われるため、本研究では無目的型という語を用いた。夢追求型とやむを得ず型についても、分かりやすさや語の長さを考慮して、夢追い型、不本意型とした。各タイプの概略については質問紙内に簡単に記し、調査対象者に示した。
- (2) 算出方法はUFJ総合研究所（2005）に準じ、「各年齢層の短時間労働者の性別1時間当たり賃金×1日当たり所定内実労働時間数×実労働日数」で計算した。1000円未満四捨五入。ただしこの算出方法だと賞与等が含まれていないので、実際はもう少し高い月収である可能性がある。

引用文献

- 小杉礼子 2002 若者の就業行動は問題か—研究の意味と範囲— 小杉礼子編 自由の代償／フリーター—現代若者の就業意識と行動— 労働政策研究・研修機構 Pp.1-13.
- 小杉礼子 2005 フリーター・ニート問題と大学 大学と教育、41、63-81.

- 厚生労働省 2006a 平成 18 年度版労働経済白書—就業形態の多様化と勤労者生活— 国立印刷局.
- 厚生労働省 2006b 平成 17 年賃金構造基本統計調査（全国）結果の概況 (<http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/chingin/kouzou/z05/kekka2.html>)
- 日本経済団体連合会 2006 「2006 年春季労使交渉・労使協議に関するトップ・マネジメントのアンケート調査結果」の速報版 (<http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2006/060.pdf>)
- 内閣府 2003 平成 15 年度国民生活白書 ぎょうせい.
- 上西充子 2002 フリーターという生き方 小杉礼子編 自由の代償／フリーター—現代若者の就業意識と行動— 労働政策研究・研修機構 Pp.55-74.
- UFJ 総合研究所 2005 増加する中高年フリーター 労務研究、58、2-16.
- 安田 雪 2003 働きたいのに…高校生就職難の社会構造 勁草書房.

University students' attitudes toward chasing dream type, aimless type, and unwilling type part-time workers

Tadashi TOZUKA

*Department of Risk and Crisis Management System, Faculty of Risk and Crisis Management,
Chiba Institute of Science*

The purpose of this study was to explore the attitudes of university student for three types of freeters (chasing dream type, aimless type, and unwilling type). Freeter refers to people between the age of 15 and 34 who lack full time employment or are unemployed, except students and housewives. One hundred and fifty-nine university students answered a questionnaire about attitudes for each type of freeters. The results of ANOVA showed that chasing dream type was evaluated positively, and aimless type was evaluated negatively.